

英和辞書で初めて統計の訳字を掲載した英和字彙について

奥積 雅彦（国立国会図書館支部総務省統計図書館長）

筆者は統計資料館で行う明治 150 年記念事業に関わることとなり、「統計」の用語に関し、幕末から明治初期に出版された辞書における変遷を調べたところ、明治 6 年（1873 年）出版の「附音挿図英和字彙」が我が国の英和辞書で初めて「Statistics」を「統計表」と訳していることが分かりました（総務省統計局HP「統計 Today No.136」）。

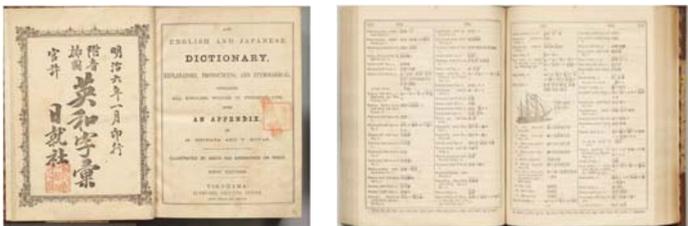
今回、「英和字彙」について、その概要、筆者のプロフィール、幕末・明治初期における英和辞書の系譜における位置づけなどについて紹介します。

1 附音挿図英和字彙とは？¹

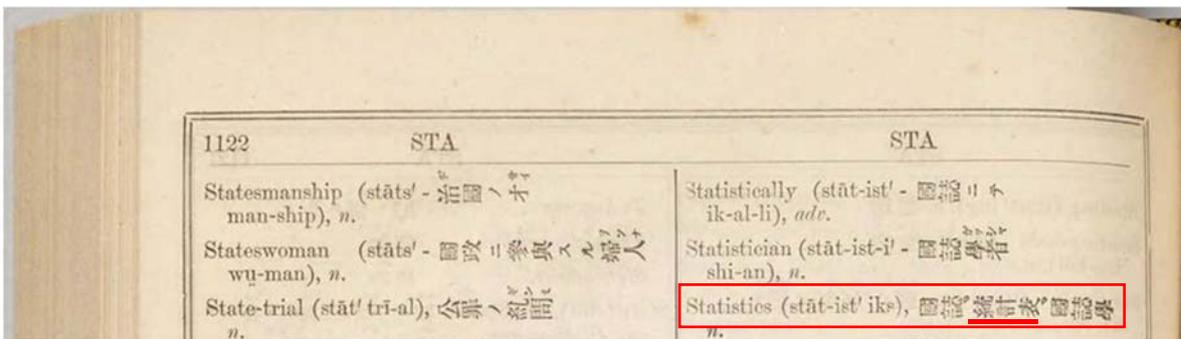
「^{ふおんそうずえいわじい}附音挿図英和字彙」は、^{しばたまきよし}柴田昌吉と^{こやすたかし}子安峻の共編で、明治 6 年（1873 年）に横浜の日就社から発行されたものです。B5 判、語数 55,000、頁数 1,546、500 余りの挿絵入り（我が国で初めての挿絵入りの英和辞書）です。

本書の底本となったのは、英国人オーグルヴィの辞書です。オーグルヴィは、アメリカの百科事典的な辞書編纂家ウェブスターの系統を継いでおり、訳語に関しては、慶応 2 年～明治 2 年（1866 年～1869 年）にかけて香港で出版された「英華字典」（英語－中国語の対訳辞書。ロプシャイト著）を主に参考にしているとされています。

■ 「附音挿図英和字彙」（明治 6 年出版）



「Statistics」を「国誌、**統計表**、国誌学」と訳しています。



資料：国立国会図書館デジタルコレクション

2 柴田昌吉（1842 年～1901 年）²

明治時代の英語学者。天保 12 年（1842 年）生まれ。柴田方庵の養子。安政 5 年（1858 年）、長崎

¹ 【参考資料】玉川大学教育博物館HP

² 【参考資料】デジタル版 日本人名大辞典+Plus

の英語伝習所に学び、のちに頭取になりました。維新後、外務省につとめ、権大書記官になりました。明治6年(1873年)、子安峻との共著「英和字彙」を完成させ、「柴田辞書」と呼ばれました。

3 子安峻(1836年-1898年)³

明治時代の新聞経営者。天保7年(1836年)生まれ。佐久間象山らに蘭学を学び、維新後、外務省翻訳官となりました。明治3年(1870年)、もとのもりみち本野盛亨らと印刷所を設立し、「英和字彙」を出版。明治7年この設備をもとに「読売新聞」を創刊し、初代社長となりました。

4 幕末・明治初期における英和辞書の系譜⁴

文久2年(1862年)、洋書調所の堀達之助が中心となりにしあまね西周、千村五郎、竹原勇四郎、みつくりんしょう箕作麟祥などが編纂に参加し、「英和对訳袖珍辞書」が出版されました。これは我が国最初の英和辞典であり、ピカード「新ポケット英蘭辞典」の蘭語の部に日本語をあてはめたものであるとされています。

しかし、200部のみでの印刷で需要を満たし得ず、慶応2年(1866年)、堀越亀之助にやながわしゅんさん柳河春三、田中芳男らが協力して「改正増補英和对訳袖珍辞書」が出版されました。その後さらに版を変えて、慶応3年、明治2年(1869年)と増し刷りを重ねました。洋書調所は文久3年(1863年)に開成所と改称されたため、「開成所辞書」とも呼ばれています。

また、慶応3年(1867年)には、幕末に来日したアメリカ人宣教師ヘボンの編集による我が国最初の和英辞書「和英語林集成」が刊行されました(通称「ヘボン辞書」)。この辞書は、和英の部と英和の部で構成され、その言葉のほとんどを各層の日本人から直接聞き書きにより作成したとされています。

幕末から明治初期にかけての英和辞典は、「英和对訳袖珍辞書」等に見られるように、英蘭辞典のようなオランダ系の辞書に依存するものが多くみられました。しかし、明治6年(1873年)にはオランダ語に頼らず、オウグルビィー(1797年-1867年)の英英辞典(1863年)を参考にした「附音挿図英和字彙」が編纂されました。

5 おわりに

「英和对訳袖珍辞書」(いわゆる「開成所辞書」)は英蘭辞書の系譜、「英和字彙」(いわゆる「柴田辞書」)は英々辞書の系譜となっています。英和辞書における統計の訳字は「統計」や「統計学」となじみのある西周(幕命により津田真道とともにオランダに留学し「統計学」を学び、我が国に移入)、(「統計学」の訳字を考案)箕作麟祥、柳河春三(「統計」の訳字を考案)のいる開成所の系譜ではなく、長崎の英語伝習所出身の柴田昌吉らによる「英和字彙」で初めて「Statistics」を「統計表」と訳していることは意外でした。維新後、柴田と子安は、外務省で箕作麟祥(明治2年(1869年)から在籍)と何らかの接点があったかもしれませんが、真相ははっきりしません。

³ 【参考資料】デジタル版 日本人名大辞典+Plus

⁴ 【参考資料】静岡県立中央図書館HP「幕末・明治初期の英和辞典等の系譜」、立教大学図書館HP「堀達之助デジタルライブラリー」、明治学院大学図書館HP「和英語林集成デジタルアーカイブス」